Graphic 1_WALL Hitotsubo next

第4回グラフィック「1_WALL」グランプリ

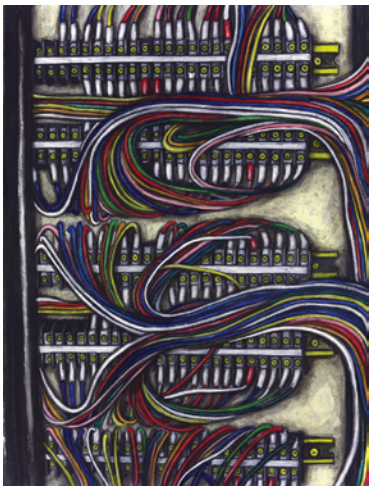
石原一博 / Kazuhiro Ishihara

Grand Prize REPORT

第4回グラフィック「1_WALL」展
2011年2月28日(月)～ 3月31日(木)
公開最終審査
2011年3月10日(木) 6:00p.m.～8:30p.m.

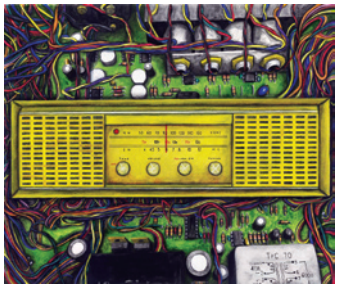
電気配線を愛する現役電気工事士がグランプリ獲得！

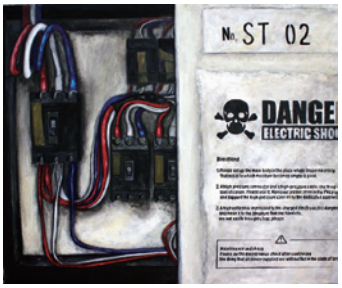
電気工事屋の家で育ち、子供の頃から好きだった電気配線を描いた作品。“好き”という純粋な気持ちと時代に逆行した男らしい作風が好印象を得た



受賞作　「巽電気」

電気配線の妙と美しさを技術者の一人として表現したく、経験で得た技術力と想像力で色鮮やかに描き制作。思い込み、思い入れ、思いやりを作品を通じて感じて欲しいです。





審査員コメント

佐野研二郎

応募のポートフォリオの中で異質だった。今の時代の中で、すごく男っぽいというのが珍しい。技術的に上手いとか下手とかいうのを越えて、何かグッとくるものがあった。

有山達也

5年前から独学で始めたのが見て感じ取れる。知らない強みと知らない弱みが同居しているような感じがして、これからどうなるか期待できる。

平林奈緒美

ポートフォリオを見た時から好きな作品。1枚1枚見ると、変なトリミングとかがあったりして、それが面白い。隙間なく並べた展示は、その面白さが伝わってこなくてもったいなかった。

大塚いちお

醸し出す雰囲気は今っぽくないが、それがすごくオリジナリティになっている。狙っているのではなく、自分の中に持っているものが素直に出ている感じがして好感が持てる。

成田久

描きたいから描くという純粋な思いが伝わってきた。好きから派生して絵が生まれたけど、これからもしかしたら立体作品を作ったり、もしかしたら電気の仕事を極めたりするかもしれない。これから先が楽しみ。

石原一博　Kazuhiro Ishihara

1980年大阪生まれ。
ペインター、電気工事士。
http://monkey-studio.jimdo.com

賞歴
2009　第168回ザ・チョイス　審査員菊地敦己　準入選
2010　HB GALLERY FILE COMPETITION 2010 大賞
　　第9回TIS公募入選
2011　第4回グラフィック「1_WALL」グランプリ

展示
2009　グループ展 AMUSE ARTJAM 2009 in Kyoto
2010　HB GALLERY FILE COMPETITION 2010　大賞個展
2011　第4回グラフィック「1_WALL」展

FINALISTS ※五十音順
飯田さやか
石原一博
小笠原徹
尾柳佳枝
金子佳代
種村有希子

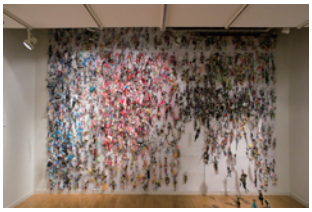
JUDGES ※五十音順、敬称略
有山達也(アートディレクター・グラフィックデザイナー)
大塚いちお(イラストレーター・アートディレクター)
佐野研二郎(アートディレクター)
成田久(アートディレクター・アーティスト)
平林奈緒美(アートディレクター・グラフィックデザイナー)

NEXT 公開最終審査 REPORT

■出品者のプレゼンテーションと質疑応答の概略

飯田さやか　Sayaka Iida

「media dolls」



街にあふれる広告を素材にした人形の集合体がmedia dolls。上京したときの渋谷や新宿の群衆に驚いたのが作品づくりのきっかけ。情報過多な社会で人々は冷静に情報を選び、それぞれのスタイルをつくる。そんな情報化社会の面白い一面を、広告というメディアで表現した。

〈質疑応答〉

●菅沼：素材となる広告チラシは、どういうふうに選んでいるの？

○飯田：街角に置いてあるものを自分で手に取り、選んでいる。

●佐野：ポートフォリオでは床に整然と並んでいたが、展示で壁に密集させたのはなぜ？

○飯田：メディアと人というテーマがあり、それを表現するために集合体にして、いろんな色彩が混じった気持ち悪さを出してみたかった。

●平林：過去の展示とは違い、今回集合体として見せようと考えが変わったきっかけは？

○飯田：もともと街に溢れるいろんな色彩を表現したくて、この人形が生まれた。最初の原点に戻って展示した。

小笠原徹　Toru Ogasawara

「FANTASY」

展示作品は生活の中から生まれた、日常のファンタジーとも言える。カラーマスキングで展示することにより、一体感や暖かさ、楽しさを出した。無意識に描かれた線や色、制作過程のハプニングや裏うつりなどを通して、どこか不思議な感覚を表現したかった。

〈質疑応答〉

●佐野：作品の中にシミが付いていたり、線が入っていたりするのはなぜ？

○小笠原："生活の中から生み出す"ことがテーマ。無意識に付けたシミもそのままにした。

●成田：1枚1枚の絵を見るより、全体を見る方がいい。マスキングテープも可愛い。

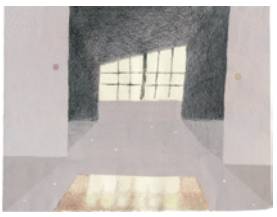
○小笠原：1枚1枚も力を入れて描いているが、全体の展示もしっかり考えた。

●大塚：やりっぱなしの感じと計算された部分のバランスがいい。アピールポイントは？

○小笠原：やはり全体のバランス。視界に入るものに相乗効果をもたらす展示にした。

種村有希子　Yukiko Tanemura

「以前は差してた光」



母の実家の古い部屋やアルバムの中の写真などを描いた。故郷に帰るたびに、好きだった森や風景が消え、淋しさを感じる。それを思い出して描いたら、少しずつ思い出からずれたような物語が出来上がった。はじめて観る映画の予告編のように、絵を見てもらいたい。

〈質疑応答〉

●平林：たくさん描いた絵の中から展示作品を12枚しか選ばなかった理由は？

○種村：1点1点をじっくり見てもらいたかったから少数に絞った。

●大塚：展示した絵の他にはどんなテーマで描いているの？

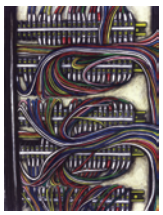
○種村：母に聞いた話をもとにしたものやアルバムの中から好きなモチーフを選んで描く。

●佐野：壁一面を展示スペースだとすると、余白部分がかなり多いが？

○種村：展示作品の点数を多くすれば伝わるとは思えない。

石原一博　Kazuhiro Ishihara

「異電気」



異電気という架空の電気会社を仕立てて、そこでの仕事を写真で報告するように絵で表現した。絵では普通は見ることのできない部分まで迫力たっぷりに表現できる。額装せずに絵を連続的に並べることで「油の匂い」「触れたら危険」みたいな感じを演出したかった。

〈質疑応答〉

●菅沼：実際に電気工事の仕事をしているということだが、モチーフは現物なの？

○石原：現場の写真を撮って、それに想像で描き加えている。現物とは違う。

●有山：今回の展示のために新たに描いたものは？ 絵を描く経験は？

○石原：21点展示した中で、13点が新たに描いたもの。5年前から独学で。

●佐野：配線をモチーフに選ぶのは何が魅力なのか？

○石原：配線が血管のように思えて、生きている感じが面白い。

金子佳代　Kayo Kaneko

「PARTY 99」

私の作品制作の工程は、まず紙にスミでドローイングする。あまり考えずにどんどん描く。そこに色を加え、新たな発想が湧いてくる。描く作業が終わったら床に並べ、どう展示するかを考える。描いたものを編集して、私が目指す方向へと作品をつくり上げていく。

〈質疑応答〉

●大塚：ポートフォリオでは赤い色が印象的だったが、今回グリーンを使った理由は？

○金子：インプレッション。理由はないです。

●有山：ポートフォリオはのびのびした感じだが、展示作品は少し詰め込み過ぎでは？

○金子：自分でも詰め込み過ぎかもと思う。今回はパネルにきっちり描こうとした。

尾柳佳枝　Kae Oyanagi

「うかぶねむるみわたす」

鳥瞰図とか航空写真みたいなイメージで描いた。また、眠りにコトンと入る瞬間や、布団に包まれているような、ぬるくて気持ちよいところを目指して絵を描いた。そして、その絵におかしな動きをつけた映像をふわっと展示している。

〈質疑応答〉

●大塚：いい意味で完成されている作品だが、「もっとこうしたい」と思うことはある？

○尾柳：もっと違う感じの絵もバリエーションとして加えたい。絵の精度を上げるとか。

●平林：この絵の精度を上げていくというのはどういうことなの？

○尾柳：もっとたくさん描いてクオリティを上げていくということ。

NEXT 公開最終審査 REPORT

■審査員の感想

ファイナリストのプレゼンテーションが終わり、ここから菅沼さんが進行。まずは各審査員に全体的な感想を語ってもらった。大塚さん:「もっとハミ出した作品が出てくると期待していたが、そうでもなかった。この6人から誰をグランプリに選んだらいいか困っている」。平林さん:「一次、二次審査と段階を経て今回で三回目の審査になるが、展示で『あっ!』と驚かせてくれる作品がなかった」。有山さん:「ちょっと厳しい言い方をすると、二次審査のときがピークだった。展示の上手下手でグランプリは決まらないが、今回は6人とも展示に良さがなかった」。佐野さん:「『1_WALL』の1回目から審査員をしているが、今回が一番難しい審査になる。全員、バランスが良すぎておとなしい印象を受ける。突出した作品がなかったので、総合的に判断するしかない」。成田さん:「みんな、あんまり熱くないな、と正直思った。『おっ、来た!』という感じがなかったのが残念」。

それでは出品者一人一人について、感想をお願いします」と菅沼さんが進行。○飯田さんの作品について。成田さん:「壁に吊るした展示よりも、床に整然と立たせていたほうが良かった。もうちょっとスカッとした感じがほしかった」。佐野さん:「グリッド状に整列していたポートフォリオではコンセプトが伝わりやすかったが、今回の展示は雑然としていて広告素材に戻ってしまった」。平林さん:「街角に広告チラシがあるので使おうと思った視点が面白いと思う。展示方法を考え過ぎてしまって、もったいなかった」。大塚さん:「挑戦しようとしているテーマは大きいけれど、一体一体の愛らしさをまずは伝えるべきだった」。○種村さんの作品について。成田さん:「ポートフォリオの印象が良くて『胸キュン!』って感じだったので、展示には残念。わら半紙とかに描いても良かったかも」。有山さん:「もっと近い距離感で見せる工夫があっても良かった。たとえば1冊の本を作ってポツンと置いてあるだけの展示もいいかもしれない」。平林さん:「私もポートフォリオは良いなと思っていた。でも、この展示はちょっともったいなかったかな」。佐野さん:「1点1点の作品は良いと思った。それを編集して展示すれば、見る人にもっと意図が伝わったと思う」。○金子さんの作品について。成田さん:「好きな作品だけど、パネルに押し込まず、もっと本人の自由にやればいいと思う」。大塚さん:「まったく同感。制作の工程をあらかじめ決めてしまっているが、もっとやりたいようにハミ出しながら自由にやって良かった」。有山さん:「アートディレクターの立場から言うと、ファイナリスト6人の中では一番仕事を頼みやすい人だと思う」。○小笠原さんの作品について。大塚さん:「ファンタジーうんぬんではなく、本人が楽しんで制作している様子や作品自体の軽さが面白い」。佐野さん:「こういう偶然的にできたものを自分の作品だと言うのは勇気がいるし、スゴイと思う。本人のピュアさが感じられる。展示を含めて全体的に評価すべき作品かも」。○石原さんの作品について。成田さん:「マニアックで、個性的でいいと思う。今後大きいサイズの絵を描きたいという意欲にも惹かれる」。佐野さん:「1枚1枚の絵はマニアックで油臭さが滲み出ていて面白い。しかしそれを合わせて展示したとき、魅力がなくなってもったいなかった」。有山さん:「まだ描き始めて5年ということだが、知らない者の強みと弱みが同居していると思う。それが面白い」。大塚さん:「モチーフもテーマも“いま”っぽくないところが逆に新鮮に感じる。世の中に媚を売らず、狙っていないところがいい」。○尾柳さんの作品について。大塚さん:「素直な見方として展示は面白い。本人のパーソナリティである“ふわっ”とした感じが良く出ている。しかし、この先の発展性はどうだろう? そのへんが審査の難しいところ」。有山さん:「ぱっと見、気持ちのいい作品。イラストレーションの仕事を1回は頼みたいと思うが、2回3回と連続して頼みたいかどうかは疑問」。佐野さん:「『1_WALL』の展示として考えた場合、今回の展示はありだと思うが、個展になった場合に会場全体にこれがくるとちょっと単調になってしまうかも」。

■審査員による投票

進行の菅沼さんが「出品者に対する感想を聞いたところで、グランプリ候補を2名選んでください」と各審査員に促し、それぞれが推す候補者を挙げてもらった。結果は……

有山/種村　石原
大塚/種村　石原
佐野/小笠原　石原
成田/小笠原　石原
平林/小笠原　石原

票を集計すると、石原5票/小笠原3票/種村2票

ここで菅沼さんが「満票を獲得してもグランプリになれなかった例もあるので、この3名について議論を」と各審査員に提案。すると成田さんが「1年後にかなりやってくれそうな人、熱い気持ちがある人を選びたい。小笠原さんはプレゼンテーションを聞いてみて、何かやってくれそうだった。石原さんは純粋な気持ちが感じられた」。大塚さんが「種村さんと石原さんは等身大な感じがして、すごく自然に良いと思えた」。平林さんが「判断基準が難しい。そこで単純にいいと思えるもの、仕事をお願いしたい人を想定したとき、小笠原さんと石原さんだった」。ここまで議論してもらったところで、審査員全員から難しいとの声があり、1位票を発表してもらうことに。結果は石原さんが5人中4人の審査員から推薦された。唯一、小笠原さんを推した佐野さんも、2名選んだうちに石原さんを挙げており、石原さんの選出には異論はない。そこで菅沼さんが「第4回『1_WALL』グランプリは、石原一博さんに決定!」と高らかに宣言。会場の一般見学者から割れんばかりの拍手が起こった。審査員の佐野さんからトロフィーを授与された石原さんが「まさか配線がグランプリを獲るとは思いませんでした。電気屋の社長も喜びます」と挨拶して会場の笑いを誘い、公開審査会を終えた。

■出品者インタビュー

飯田さやかさん:初めてこういうコンペに参加しました。審査員の方にも考え過ぎだと指摘されましたが、コンセプトにこだわり過ぎたかも。人に見せる際に大切なことを学べたと思います。

種村有希子さん:疲れました。油絵学科だったので、学校時代の先生とグラフィック界の第一線で活躍されている方々の見方が違うことが印象的でした。編集って何? コミュニケーションって何? また勉強しなくちゃ。

金子佳代さん:個展をやりたかっただけに、結果は残念でした。でも、作品としてやりたいことはできたので悔しくはないです。グランプリ作品が選ばれた理由も良くわかったので、次に繋がります。

小笠原徹さん:スッキリしました。作品の制作から展示、プレゼンテーションまでやりたいことはやれましたから。全体を通して楽しむことができました。審査員の方と対話できたのが収穫です。

石原一博さん:公開審査は楽しかったです。「1_WALL」に参加できただけでもうれしかったのに、グランプリをいただくなんて。選ばれてうれしい半面、1年後の個展を考えると怖さもあります。期待を裏切らないように、みなさんを驚かせられる作品をつくりたいですね。こんな素敵な機会を、ありがとうございます。

尾柳佳枝さん:自分が思っていたところを審査員の方に指摘されて、すごく頷けるところがありました。メチャありがたかったです。自分自身、もっとやっていかなアカンな、と思いました。

<文中一部敬称略　取材・文/田尻英二>

■お問い合わせ先
株式会社リクルート　ガーディアン・ガーデン
〒104-0061　東京都中央区銀座7-3-5　リクルートGINZA7ビルB1F
TEL:03-5568-8818　FAX:03-5568-0512　http//rcc.recruit.co.jp

Guardian Garden PRODUCED BY RECRUIT